



2012・8

**SORA** 44号

福岡 矢野百合子

弦楽の音色に咲けり濃紫陽花  
萍にがんじがらめとなりし濠  
みずすまし耳すますことあるらしき  
蛍火や人ははかなきものが好き  
はたはたと旗のはためくかき氷

東京 山田正子

くちなしや人に生まれて無縁塚  
ゆく先は別の螢火桜桃忌  
河童忌はフランスの水買ふ日なり  
地球儀のどこかで戦えごの花  
いつからかあきらめ上手に羽拔鳥

福岡 田代貞枝

伊都国の一と色となる麦の秋  
海よりの風を平らに麦畑  
山清水神の渡りし石の橋  
万緑や古木を杖に野路辿る  
蕎麦切りのやや固めなり志摩の夏

福岡 山内碧

睦まじく二羽の雀や明易し  
母の日や敬語にて来し子の手紙  
紋付の遺影古りゆく青田風  
噴水の周りの空白昼の街  
姉妹言ひたい放題冷さうめん

行橋 安武 晨子

萬緑を風の揺さぶる村社

病窓の一面を占め夏の空

谷越えて祭準備の遠太鼓

病室に届かぬ夏の風を見る

日本語は消えてゆくのみ秋近し

福岡 樋口 みのぶ

春昼の花印つけ退院日

手をついて迎へられたる夏座敷

待つことも楽しんでゐる夏料理

いつの世も母は待つ身やほととぎす

雛段の雛の翳りや母恋ひし

東京 古川 夏子

雹降りしあとの満月的礫と

椎の香や無縁仏の俱会一処

青葉木菟男ばかりの句会かな

納得が胸に落ちゆく岩清水

ユニフォーム汗の匂ひの敗け投手



空作品抄 — 柴田佐知子抽出

父の夢母の願ひや麦こがし

舳舟畳二枚や蠅叩く

開け閉てに潮の匂ひや冷素麵

傘干せばまたもこぼるる柿の花

下駄履きの家族写真や立葵

出て行けば帰る家なし繻の花

走り根の上へ下へと蛇逃ぐる



高倉 和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部 早苗

柴田志津子

だいじみどり

栗原京子



初恋の人は軍神雲の峰

箱庭を宇宙飛行士のやうに見る

ふる里の襖外せば子が走る

春の海へと大河は曲る幾度も

たちまちに嘘はふくらむ心太

武者の顔して田植機の戻り来る

みなもとに竜王おはす山開き

正論の少し曲がりてビール飲む

鶏のまぶた重たし合歡の花

母の日を酔ひぬ小言の母が欲し

芭蕉の句胸より去らず鶉飼舟

葉桜や語るに遠きことばかり

神官の背負はれてゆく山開き

高倉恵美子

小林朱夏

秋 千晴

長 憲 一

あさなが捷

宮井知英

鳳 蛮 華

亀井紀子

吉 田 菫

田岡千章

青木朋子

松田明子

野畑さゆり

着崩れを直しつつ見る夏の山

筒鳥の筋惜しみて鳴きにけり

螢火や人ははかなきものが好き

くちなしや人に生まれて無縁塚

伊都国の一と色となる麦の秋

噴水の周りの空白昼の街

谷越えて祭準備の遠太鼓

いつの世も母は待つ身やほととぎす

納得が胸に落ちゆく岩清水

風入れや嫁して貰ひし父の文

金環日食子つばめは口開けて

少年は故郷に老いぬ車前草

託児所はこの裏通り花みかん

苑 実 耶

原 友 子

矢野百合子

山田正子

田代貞枝

山内 碧

安武農子

樋口みのぶ

古川夏子

宮井知英

戸栗末廣

吉田 菫

柴田志津子



雪柳活ける間ももう花こぼす

たらちねの母は乳房の裏も汗

世の端の出口が開いて昼寝かな

落雷に五感もろもろ狂はさる

真つ盛りのさつきの赫さ何か忙し

あつばれな乳房に触るる金亀子

日当たればふくらむ山や武者幟

一刷毛に祭の稚児のできあがる

蚕豆をひたすらむきぬ地震の日は

やうやくに思ひ出となる螢かな

藤棚の翳れば海の底と思ふ

水辺行く鎌のちらりと日雷

隅々に荷の置かれたる花筵

白水良子

小林朱夏

原友子

秋千晴

小川涼

亀井紀子

織田高暢

松田明子

野畑さゆり

あさなが捷

鳳 蛮華

石川 叔子

長 節子

西瓜切り鮮やかな円現るる

水槽の主となりたる屑金魚

ひよつとことなりどんたくの列にをり

包丁の長さの足りず西瓜切る

こつこつと歩むがこつと亀鳴けり

生れし児を抱きて緑雨の夜明けかな

朝焼けの沙に消えゆく鉄路かな

生き死には埒外梅酒仕込みけり

蟻が引くパンくづ蟻を隠しをり

振花や待ちぐたびれしバスの来る

つばめの巣鑑真になき私生活

寺の名のつづくバス停青嵐

子がうたふ部屋の隅から春めけり

栗原京子

山田正子

矢野百合子

今井春生

桜三奈子

仲里奈央

中原俊之

田岡千章

苑実耶

田代貞枝

岸千手

池田華甲

乾有杏



梅雨寒や寝覚めし床のなほ広き

氷屋の真昼の土間のがらんどろ

晩涼の病棟まもる深夜灯

夏鶯貸し農園のにぎはふ日

さくらんぼ幸せですと書いてある

ベネチアの耳飾り映ゆ夏帽子

気ままなる晩年であり更衣

はにかみて進学校の名を告ぐる

螢狩野良着の後ついて行く

夾竹桃幾度過ち許しても

朝市の荷を提げ戻る宿浴衣

水たまりよろこんでゐる日焼の子

涼しくて新聞隅々まで読みぬ

山口弘子

古川夏子

安武晨子

遠山のり子

青木朋子

清水量子

ふじの茜

吉村摂護

山内碧

湯村栞

堀川征孝

白木原裕毅

神谷耕輔

# 空作品評

柴田佐知子

開け閉てに潮の匂ひや冷素麵

荒井千佐代

句意の説明を要しない平明で分かりやすい情景である。この句の妙味は「開け閉てに」にある。穏やかな日常が、小津安二郎の映画を見ているかのような日本のひそやかな一場面である。

初恋の人は軍神雲の峰

高倉恵美子

戦争のうねりの中で命を断たれた青年は、初恋の思い出の中でいつまでも瑞々しい姿のままであろう。悲痛な内容なのだが、「初恋の人は軍神」という一気呵成の表現と「雲の峰」の響き合いが強靱な詩情を構築している。この「雲の峰」には南方の激戦地、或いは終戦間際まで大空へと飛び立った特攻隊、原爆投下なども想起させられる。

ふる里の襖外せば子が走る

秋

千晴

「襖」は冬の季語だが、風通しをよくして涼を得る「襖はづす」は夏の季語。ついでに言えば「障子入るる」や「襖入るる」は秋の季語。

掲句は里帰りをした広い生家であろうか。襖を取り払うと部屋や廊下は広々と繋がる。子供の頃、その広さが嬉しくて走り回ったことを私も思い出す。千晴さんの純粹な視線が、純粹な景を涼やかに捉えている。

春の海へと大河は曲る幾度も 長 憲一

遙か上空からの俯瞰図。上五の「春の海へと」の字余りによる大らかな導入と、下五の「幾度も」という悠々たる時間の詠み込みが、大景を格調高く捉えている。春の駢蕩たる自然への讃歌のごとき作品。

たちまちに嘘はふくらむ心太 あさなが捷

ちよつとした嘘は、それを隠すために更なる嘘を生む。常識的な内容なのだが、「ふくらむ」がうまい。また句の内容を受ける下五の季語が「心太」で軽やかな風合いが醸し出されている。苦笑の響きを季語の「心太」がもたらしている。(以下略)

# 空集

柴田佐知子選

打水や小路大路に灯の点り

糸田 宮井知英

百年の調度の据る夏座敷

仁王立ちせし子に着する浴衣かな

能楽堂出て現世の大花火

水中花湖底のやうな喫茶店

風入れや嫁して貰ひし父の文

水張つて桶休ます大暑かな

水面ゆくくちなはに水尾なかりけり

兵庫 戸栗末廣

金環日食子つばめは口開けて

稚魚の列すぐ萍に隠れけり

杉の皮寺に積みある芒種かな

あめんばう一蹴りごとに考ふる

隠れ沼のふくらむ八十八夜かな

隣席にポマードにほふ昭和の日 粕屋 吉田 葎

夏萩や僧は肚から声を出す

深鍋にパスタの渦や長崎忌

山笠走る道へ朝飯かき込んで

五月雨やものをうつ音みな違へ

少年は故郷に老いぬ車前草

西国の果の燈台黄沙降る 福岡 柴田志津子

店仕舞多き界限夕薄暑

託児所はこの裏通り花みかん

水源の森に湧き立つ夏の雲

松の芯摘んで寺苑の改まる

道理などどうでもよくて梅雨鴉

聖五月姉は乱れを見せず逝く 福岡 白水 良子

葉桜や足より拾ふ姉の骨

真新なる姉の位牌に新茶汲む